

木版画クロスカルチャー ヨーロッパと日本

■展示作家：Laura Boswell（ローラ・ボズウェル、）

Mara Cozzolino（マーラ・コッツォリーノ）

Paul Furneaux（ポール・フルノー）

■会 期：2019年3月6日（水） - 13日（水） 12:00 - 19:00

■会 場：CfSHE Gallery（シー・エフ・シー・ギャラリー）

■住 所：東京都千代田区外神田6-11-14 アーツ千代田 3331 教室 B-109

会期中無休・入場無料

ギャラリー・ホームページ：<http://endeavor.or.jp/mi-lab/lab-archives/gallery/>

■担 当： 金濱 (infodesk@endeavor.or.jp)

世界で『Mokuhanga』と呼ばれ浸透しつつある日本の水性木版画技法。その技法を中心に用いて制作しているヨーロッパ人作家の作品を展示いたします。

木版画を制作し始めたきっかけやそれによる作品の変化を探りながら、海外の日本文化の捉え方、特に古くからのヨーロッパ文化を背景に持つ彼らの感性の日本文化との差異・融合、読み替えを発見する試みです。双方の文化差異はまた、摺り・彫りに使われる道具の使われ方の違いがそれぞれの職人の姿勢や能力の発揮の仕方に関わっていること、材料が自然のもので環境にやさしく制作にもスペースがいらない携帯芸術として海外からの注目を集めている点などからも読み取ることができます。

イタリアからマーラ・コッツォリーノ、イギリスからローラ・ボズウェルとポール・フルノー（スコットランド）が同時に展示いたします。それぞれ異なった主題およびジャンルの作家が、日本の木版画技法をどう発展させ作品へ昇華させているかをご覧ください。

本展覧会は当ギャラリーが取り組む Contemporary Mokuhanga という伝統木版・創作版画の枠を超えた国際的な標題の下で出品します。

作家を迎えるアーティスト・トークイベントを3月9日(土) 17:30より開催いたします。是非お出かけください。

■作家略歴

Laura Boswell（ローラ・ボズウェル）、イギリス

リノリウム版画と日本の伝統木版画を専門とし、風景画を制作する。ウェールズ大学美術・美術史学士。近年は Royal Society of Painter Printmakers のメンバーに選抜される。日本では二つの木版画レジデンスに参加し職人の技術を学んだ。また日本独特の、最小限の要素による空間の捉え方に影響を受けている。日本人が尊ぶ厳しい訓練を取り入れ、直情的な線および刷毛の動きと同時に、細密な彫りと摺りを実践することにより自然な流れを表現している。作品は House of Lords and the Library of Wales な

ど国のコレクションにも所蔵。作家活動のほかに講師、美術出版物への執筆、パブリックアートプロジェクトにも関わっている。今回の日本滞在ではアーツ千代田3331のアーティスト・イン・レジデンスプログラムに参加。

個展 (抜粋)

- 2019 Obsidian Gallery, Stoke Mandeville
- 2018 Upstairs Gallery, Berkhamsted
- 2017 Obsidian Gallery, Stoke Mandeville
- 2016 Sunbury Gallery, Sunbury on Thames
- 2016 Upstairs Gallery Berkhamsted

そのほかの展覧会 (抜粋)

- 2019 Birch Tree Gallery, Edinburgh
- 2018 show and residency with James Boswell, RK Burt Gallery, London
- 2018 Printfest, Ulveston, Cumbria - selected exhibitor
- 2016 Blackheath Gallery, London
- 2016 Art in Action, Waterperry, Oxford

作家 Web サイト

<http://www.lauraboswell.co.uk>

Mara Cozzolino (マーラ・コッツォリーノ), イタリア

イタリア・トリノ生まれ。リリーフ制作・絵画・ドローイングを経て Kurt Mair の下で銅版画を学ぶ。2011年日本に初来日して以来日本の水性木版画に魅了され、2012年に国際木版画ラボ(MI-LAB)の木版画アーティスト・イン・レジデンスに参加。また2011年・2014年・2017年の国際木版画会議にも参加。現在故郷であるトリノのアヴィリアーナで自身のスタジオにて木版画のワークショップ開催している。イギリス、スコットランド、日本、スペイン、キプロス、アメリカで展示。今回ローラと共にアーツ千代田3331のアーティスト・イン・レジデンスプログラムに参加している。

個展 (抜粋)

- 2018 *Light from the floating world*, Beertola, Cuneo, Italy
- 2016 *Luci dal mondo fluttuante 2*, Santa Croce gallery, Avigliana, Italy
- 2016 *Era una notte stellate*, Mirror gallery, Vicenza, Italy
- 2016 *Above me: a song of trees*, 3331Art Chiyoda, Tokyo

そのほかの展覧会 (抜粋)

- 2018 Woolwich Print Fair, London
- 2018 *Fragment encounters* at Impact 10, Santander, Spain
- 2018 *Japan*, West Yorkshire Print Workshop, UK

2017 *Beauty of Mokuhangā*, University of Manoa, Honolulu

アーティスト・ステートメント

11歳のころから版画に魅了された私は様々な技法を経て、環境へやさしく制作スペースを必要としない木版画に至りました。近年は樹木と星空を制作しています。小さな穴の無数に開いた版木を何度も摺ることで星を表現し、複雑な枝は墨によりできる限りベタに摺ります。これらの木々は落葉した冬季に撮られた古い写真のスクラップから生まれたものです。それは木版画でこそその魅力が引き出されます。スケッチを繰り返してエッセンスだけを引き出し、各々が識別され得るだけの特徴を残しながら抽象的で幾何学的なイメージに変換するのです。

作家 Web サイト :

www.maracozzolino.com

Paul Furneaux (ポール・フルノー) , スコットランド

彼の木版画との関わるはまるでその制作過程のように長いものである。1990年初めて日本を訪れた時に木版画を知り、母国で井上厚氏のデモンストレーションを見た際、彼に木版画を学ぶことを勧められた。1996年には奨学生として半年間日本語を学んだあと、多摩美術大学の研究生を経て同大学大学院を修了。2000年に母国へ戻った後も木版画での制作を続けた。数年後、アトリエが火事に遭い長年に渡り制作してきた作品や日本の道具材料が消失してしまった。その後コネチカット州現代版画センターでのレジデンスに招待された頃、作品制作を再開するようになった。エジンバラをはじめヨーロッパやスカンジナビア地域で木版画を紹介するためのワークショップや展覧会を開く（マラー・コッツォリーノに最初の木版画の手ほどきをしたのはポールだった）ほか、2012年の MI-LAB 木版画レジデンスにて更に技術を磨いた。その後平面から立体へ、よりスケールの大きな作品へと幅を広げたのは伝統的な彫りと摺りの技術に熟達すると同時にそこから独自の表現を見つけられると考えているからだ。傍目には制限の多い技法と思われるかもしれないが、個の表現としてコンテンポラリーアートシーンにも通用する潜在的な可能性に満ちたメディウムなのである。これは多摩美術大学でメディウムを伝統的な視点から捉えないと教わったことでもあり、より多くの可能性を技法に見出せる。

2012年には木版画を表面に張り付けて、まるで立体を包み込む皮のような版画をまとった彫刻作品を東京メトロポリタン美術館『Prints 21』展にて発表。最近では『City Lights』と『City Trees』は今年4月にオープンする Browngotta Arts Gallery (アメリカ) における50の国際芸術家による『美術とアイデンティティ展』に選ばれている。

作家 Web サイト :

<https://www.paulfurneaux.com>

■ 展示作家の一人マーラ・コッツォリーノが、3331アートフェア・メインギャラリーにおいても CfSHE 推薦作家として1点展示いたします（別途チケットが必要です）。

日程： 2019年3月6日（水） - 2019年3月10日（日）

開場時間および入場料については特設サイトをご覧ください (<https://artfair.3331.jp/>)

コッツォリーノはイタリアのトリノを中心として世界でも活動する版画アーティストです。富士河口湖での水性木版画 AIR に早くから参加し、そこで培った技法で制作を続けています。

彼女の作品は木版画の採用により、そのスタイルが著しく変化しました。現在は夜景に生える樹木のシルエットを中心として、透明絵具と和紙とが生み出す木版画独特の柔らかな表現に逆らうように暗闇を追及しています。そのモチーフはもとより構成や色の表現は西洋芸術の感覚に通ずるものであり、それを和の技法から引き出すことによって対極にある両文化の融合や比較といった普遍的テーマが見てとれます。
